

新スタッフから

温暖化時代の信州にて研究する抱負

栗林 正俊 (温暖化対策班)

2015年4月より飯綱庁舎に赴任しました。出身は東京の下町ですが、「上を見れば雲や鳥、下を見れば花や虫」、といった具合に幼い頃から自然観察が好きです。学生時代から信州へよく登山に来ていた自分が、飯綱庁舎にて信州の自然環境を対象に働けることに大変な喜びを感じています。

自身の専門は気象・気候学で、野外観測、リモセンデータ解析、数値モデルを駆使して、地域規模の大気汚染や気候変化の影響評価・将来予測を行ってきました。飯綱庁舎では、信州における温暖化の実態把握・影響評価・適応策の策定・啓蒙活動を推進すべく、精一杯がんばります。気候変

化が世界的な問題となる中で、多様な地域特性をもつ信州の気候は今後どうなり、農業や生態系などにどう影響しうるのか、種々の観測やモデルにより明らかにしていきたいと思えます。



北アルプス蓮華岳にて

植物の生き様が気になって

石田 祐子 (自然資源班)

4月から植物標本室の管理・運営を担当しています石田祐子です。

標本というと、あまり馴染みがないかも知れませんが、私達の生活と無関係でもありません。山菜を食べたり、栗ご飯を食べたり。私達は、目の前の植物が美味しいか、不味いか、毒をもっているのか…1つ1つ見分けて利用しています。その名前を担保するのが植物標本です。さらに、植物標本は環境評価や予測の基礎データにもなる貴重な資料です。

私は野外で植物に出会うと、それぞれの植物の生き様が気になってしまいます。そんなこんなで、気がついたら雪とうまく付き合いながら生育

している植物の研究をしていました。利用しやすい標本室を目指して室内で標本整理をしながら、この植物はどこでどの様に生きているのだろう…そんなことを考えながら日々、植物と向き合っています。

八方尾根にて
白馬三山をバックに

けものたちの暮らしに迫ります

黒江美紗子 (生物多様性班)

4月より生物多様性班の所属となりました。ツキノワグマやニホンジカ、カモシカなど“けものたちの暮らし”に迫る仕事を担当します。これまでは、屋久島にいるヤクシカ(体の小さいニホンジカ亜種)や福岡のアナグマ・イノシシを観察してきました。けものたちがどのような場所に多いのか、数が増えたり減ったりするのはなぜか、を人の暮らしとの関係に着目しながら紐解いてきました。

長野の調査や生活は初めてなので、県の広さにもまず驚き、けもの種類や数の多さにまた驚いています。一方で、山に囲まれた地形やコイを食べる習慣は、田舎である山形県の米沢と似ており親

近感もあります。里に降りてくるクマ、植物を食べ尽くすシカ、雪解けとネズミの関係など、見てみたいものが沢山あり長野の四季が楽しみでなりません。よろしくお願ひします。



屋久島にて